# 第十九講　都市論・故郷論

人は誰もが、どこかの場所にかかわっている。故郷とは、人間が生れてから最も早い時期に出会った場所である。場所は都市であったり、町であったり、村であったりする。故郷とは、まだそうした区別の意味も知らないときに出会った空間と場所なのである。たんに生れただけで全く意識のない場所は故郷とはいいにくい。故郷とは一人の人間が子供のとき育った生活の場であり、彼を取りまく世界であり、性格を形成していった環境である。

故郷は抽象的な空間や場所でなく、具体的な風景になっているだろう。いまはありえない風景である田舎の故郷の情景をうたった、兎（うさぎ）追う山、白樺、水車小舎、からたちの垣根などが心にうったえる歌になる。そんな典型的なムラの姿でなくても、マチのなかにもA原風景はある。よく遊んだなんでもない道端の草むらや、小川の橋、駄菓子屋の店先、苔（こけ）のむす石垣の下など、甘ずっぱいほのかな香りと、淡い色合いで思いだす。それは、はっきり憶えていない風景でも、人々の自己形成に働き、深層のなかに沈澱（ちんでん）してゆく。

故郷は、人生の最初に出会い育まれた場所であり、心の底に刻みこまれた風景と出会った場所だという意味なら、都会生れでも、誰にとっても故郷は存在する。これが故郷の原点である。

ただ、故郷という言葉には、こうした意味のほかにもいろいろな意味がふくまれている。まず自然の豊かな田舎という意味合いがある。都会に生れ育った人々にとっては、自然に乏しく、人工的環境であることから故郷という言葉は使いにくい。田舎から都会へ出てゆく人々が圧倒的多数であったとき、故郷とは田舎、ムラの意味でもよかった。だが、いまはちがう。「都会ッ子」が多くなった今日、故郷は別に田舎、ムラを意味しなくてもよいはずである。

故郷という言葉には、甘いひびきとともに苦い思い出もからむ。とくに農村や、封建制の強い町で、地縁、血縁のしがらみだけが強く働き、自由を束縛する抑圧的、閉鎖的な意味が入っていることもある。だから「B故郷は遠くにありて思うもの」である。それに対して「都市の空気は自由にする」ものがある。束縛の少ない、地縁、血縁の薄い都会には故郷という言葉が使いにくいところがあった。だが、都会にも新たな地縁が生れつつある。

故郷というのは無条件に心も身体も帰れるところである。森鷗外は遺言で故郷の津和野へ遺骸を返した。そこには一切の官職などを記すことなく、ただ石見（いわみ）人森林太郎として葬るべきことをのべていた。そうした心も身体も帰れるところという意味で、都会人が故郷をもてるかどうかは疑問である。農村へ行くと、小高い丘の見はらしのよいところに墓がおかれている。故郷の風景を眺め、後の人々の営みを見下して眠るにはかっこうの場所である。それは土地と深くむすびついている。そんな墓地は都会には求めにくい。身も心も帰る場所としては都会は不向きなのであろう。

C<u>故郷は無償の愛情のもてる場所である。</u>自然が豊かな、古典的な意味での故郷は、都会に出て、人工的環境と雑踏のなかで疲れた人間にとっては懐しいところかもしれない。だが、無償の愛情をもてる場としてなら、都会ではどうしてそういう気持がもてないのだろう。都会でも、自分と空間の出会いの場所、育ててくれた場所に他とちがうものを感じ、愛惜の念をもたないことはないだろう。もしそうでないなら、何か努力をするべきではないか。都会は醜いからというなら、美しくしてゆくべきではないか。都会だからといって、原点としての故郷になりえないものではない。

鷗外はいくつかの都市政策論を書いている。なかでも「市区改正論略」は短いが、簡潔に都市のあるべきさまをのべている。論点は正確だが、やや教科書的で東京や都会に対しては D<u>客観的な立場に立っている。</u>これに対して幸田露伴の「一国の首都」は東京の都市政策について論じた大論文であり、冷たく都市をつきはなすのではなく、E<u>露伴の東京に対する強い愛情</u>が滲みでている。

鷗外は津和野の人であり、国際的にも科学的にも豊富な知識と洞察をもっており、東京に長く住んでいたが、東京は異郷であった。だが、露伴は、旧幕臣の家に生れ、東京に強い愛情と誇りをもっていた。だから、「一国の首都」には鷗外にはない迫力がある。

> 我が東京をして漫然たる人間集会処たらしむべからず。……都会とは多数人の集る処なりということ以外に都会を解釈すること無く、また敢えて別の解釈を試みんともせず、常に自己に奉ずることのみ甚だ厚くして自己の住する土地に対する感情甚（はなは）だ冷（ひややか）に、自己の利害には鋭敏なれども隣人の休戚(注)には一顰（いっぴん）一笑をも惜（おし）み、……是等の冷淡なる自己中心主義の人士は、我が東京をして漫然たる人間集会処たらしめんことを欲するものにして、厳しく排斥せざるべからずや論無き也。

露伴の東京への強い愛情が噴出している。排他的に東京に人が来るなとはいっていない。一国の首都である以上、人の集り住

むのは当然である。だが移り住んだ以上、その都市にもっと関心をもち、利己的でなく、東京をよくするための努力をしてほしいということである。露伴にとって東京は一国の首都であるが、それ以上のものである。言葉は用いなくても原点的な意味での故郷でもあった。故郷という意味のもっいろいろな夾雑物（きょうざつぶつ）を取りされば、原点的な意味の故郷をもたない人はいないはずである。ただ都会を故郷とする場合には、感傷的な過去の故郷を追うのではなく、自らも努力してつくってゆく積極的な意味の故郷である。最も今日的な意味で都会の故郷性を論じているといえる。

（田村明『都市の個性とはなにか』による）

（注）休戚……幸と不幸

問１　傍線Ａ「原風景」とはどのような風景か。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　最初に心の底に刻みこまれた風景　　②　豊かな自然に満ちた風景
③　いまはありえない幻の風景　　④　広々とした原のひろがる風景
⑤　思い出の中にだけ生きている風景

問２　傍線Ｂ「故郷は遠くにありて思うもの」とあるが、その原因となっているものは何か。文中から十字以内で抜き出せ。

問３　傍線Ｃ「故郷は無償の愛情のもてる場所である」とあるが、その理由は何か。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　自分の生れ育った場所だから。
②　無条件に心も身体も帰れる場所だから。
③　心の底に刻みこまれた風景と出会った場所だから。
④　自分を慰めてくれる自然がある場所だから。
⑤　甘ずっぱい思い出のある場所だから。

問４　傍線Ｄで、鷗外が東京に対して「客観的な立場に立っている」理由を示している部分を、文中から十字以内で抜き出せ。

問５　傍線Ｅ「露伴の東京に対する強い愛情」とあるが、それは具体的にどのような成果となってあらわれているか。文中の語を用いて十字以内で記せ。

# 第十九講　知識モノ解説

## 文学史・人物解説

●筆者　田村明＝たむら　あきら（一九二六〜二〇一〇）東京大学の工学部建築学科、法学部法律学科、法学部政治コースの三つを卒業。横浜市の都市政策、都市計画にもかかわる。法政大学名誉教授

●森鷗外＝もり　おうがい（一八六二〜一九二二）石見（いわみ）の国、津和野（今の島根県）生まれ。東京大学医学部卒。陸軍の軍医となり、文筆業の一方で、軍医の最高位、軍医総監にまでなる。本名は、森林太郎（〝しんりん　たろう〟ではなく〝もり　りんたろう〟）。代表作『舞姫』『高瀬舟（たかせぶね）』（小説）『於母影（おもかげ）』（訳詩集）など

●幸田露伴＝こうだ　ろはん（一八六七〜一九四七）東京生まれ、東京英学校（今の青山学院大）中退。第七講『おとうと』の筆者（幸田文（こうだあや））の父。

●室生犀星＝むろう　さいせい（一八八九〜一九六二）石川県生まれ。文中の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と詠んだ詩人。続きがあって「そして悲しくうたふもの」。故郷への望郷（遠くから懐かしむ）の詩ではなく、帰郷してもいいことはなく、遠くから思っているくらいがちょうどいい、という内容のようです。詩集には『愛の詩集』『抒情小曲集』などがあり、小説作品としては『幼年時代』『性に目覚める頃』『或る少女の死まで』などがあります。『幼年時代』はセンター試験でも出題されています。スタディサプリ「高１高２現代文」第八講で扱っています。学年を問わず、こちらもアタックすることをおすすめします。

**語句**

封建制＝ほうけんせい→厳密には、領地を家臣に与え、代わりに軍役などの義務を課すような主従関係だが、単に主従関係や、古くさい上下関係を意味することが多い。

しがらみ→川で魚などを獲るためのわな、しかけが本来の意味で「柵」と書く。もっと一般には「まとわりついて、離れないもの」「縛り」といった意味で使われる。

かっこうの→ぴったり合った、うってつけの、ということ。漢字では「恰好・格好」

雑踏＝ざっとう→たくさんの人出で、にぎわうこと

無償＝むしょう→報酬、ご褒美、見返りがないこと。対義語は「有償」

関連語　無形＝むけい→固定的なかたちのないもの。例えば、「無形文化財」は、保存されたモノそのものではなく、受け継がれた伝統的な技術を指す。対義語は「有形」

漫然＝まんぜん→はっきりした目的や意図や目標もなく、ということ。ただ何となくという意味

排斥＝はいせき→受け入れ拒否。強く拒むこと

夾雑物＝きょうざつぶつ→混じりこんでいる余計なもの

感傷的＝かんしょうてき→センチメンタル。ものごとに心を動かされやすくなっている状態。失恋などの心の痛手をいやすために出かける旅は「センチメンタル・ジャーニー」＝感傷旅行

# 復習問題　第十九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）ホウ建的な身分制度のなごり　①法　②封　③奉　④邦　⑤保

（イ）伝統的な因習にソク縛される　①塞　②即　③捉　④則　⑤束

（ウ）イ骸を故郷の墓に葬る　①易　②居　③遺　④緯　⑤衣

（エ）中世の古テン文献を収集する　①典　②展　③填　④点　⑤店

（オ）都会の雑トウと喧騒を忘れる　①頭　②到　③盗　④倒　⑤踏

（カ）故郷に無ショウの愛をそそぐ　①省　②賞　③償　④性　⑤焦

（キ）優れたドウ察にもとづく分析　①洞　②同　③胴　④銅　⑤動

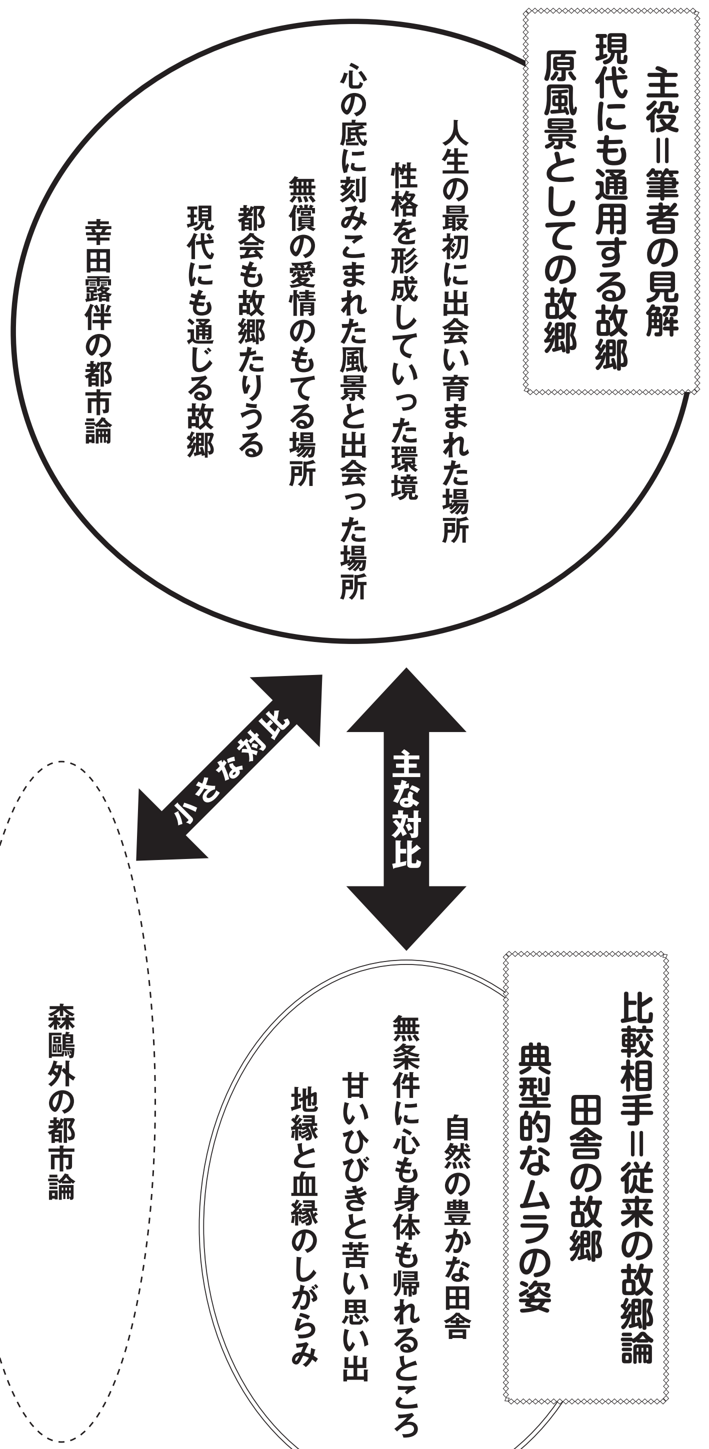
（ク）語る言葉にハク力がともなう　①拍　②白　③博　④迫　⑤伯

（ケ）作家のエイ敏な感性にふれる　①英　②栄　③衛　④鋭　⑤映

（コ）夕暮れ時に感ショウ的になる　①賞　②傷　③渉　④照　⑤衝

# 第十九講　都市論・故郷論

《本文の対比構造》



**《解説》**

**問１**《傍線部説明・選択肢》

「原風景」は、筆者が強調する「原点としての故郷」で、現代でも通じる、都会にも通じる故郷です。したがって、①が正解です。他はすべて、かつての農村のような故郷の話、「典型的なムラ」です。つまり、ことごとく対比混乱の誤りです。

**問２**《傍線部説明・抜き出し》

こんどは比較相手の故郷の話ですよ。ムラの話です。故郷といってもムラでは「甘いひびき」だけでなく「苦い思い出」もくっついてきます。いいことばかりではないのです。これを表現しているのが「故郷は遠くにありて思うもの」です。つまり、故郷とは距離を保って懐かしむくらいがちょうどよく、近づくとあるいは、その中にいるといやな縛りもあるよ、という内容です。では、ムラ（「農村や、封建制の強い町」）には何があったのか、「自由を束縛する抑圧的、閉鎖的」なものとはなにか。設問条件の「原因」「十字以内」に当てはまるのは、「地縁、血縁のしがらみ」です。これが答えです。また傍線部の後にある対比を通して、確認と確信もできます。すなわち、「都市の空気は自由にする」が対比で、そのわけ・原因は「地縁、血縁の薄い」です。

**問３**《傍線部説明・選択肢》

「無償の愛情のもてる場所」は、筆者側の故郷です。問1と類似問題です。②の「無条件に心も身体も帰れる場所」、④の「自然」、⑤の「甘ずっぱい思い出」は、すべて比較相手の方、ムラの話ですね。対比混乱の誤りです。①はどうでしょうか。本文には「たんに生れただけで全く意識のない場所は故郷とはいいにくい」とありますから、「自分の生れ育った場所」では不十分ということになります。記述に反する誤りとも対比混乱の誤りとも言えます。「性格を形成していった環境」「心の底に刻みこまれた風景と出会った場所」とまでいかないと、筆者が言う故郷にならないのです。したがって、③が正解です。

**問４**《傍線部説明・抜き出し》

森鷗外と幸田露伴という小さな対比に関わる問題です。幸田露伴が、東京に「強い愛情と誇り」という、いわば〝主観的〟に

東京に関わっているのに対し、森鷗外は「客観的な立場」です。この両者の違いはどこからくるのでしょうか。つまり「理由」は何でしょうか。ここでも対比がヒントをくれます。まず、幸田露伴は「旧幕臣の家に生れ」です。江戸幕府の重要な地位にあった家系ということで、ともあれ東京生まれです。対して、「鷗外は津和野の人（現在の島根県）」です。この「鷗外は津和野の人」を解答に選んだ人は、△です。間違いとは言えませんが、○とは言えません。「鷗外は津和野の人」って、〝つまり、どういうことよ〟というツッコミが可能だからです。では、つまりどういうことかというと、「東京は異郷であった」ということです。だからこそ東京に対して「冷たく」「教科書的で」「客観的」になるわけです。こちらが完全解答です。問４の設問条件に十全に応えることになります。こうして、候補が複数出る場合、よりよさを追求します。

**問５**《傍線部説明・記述》

こんどは、幸田露伴に関わる問題で、同時に筆者の主要意見に関わるものでもあります。つまり、筆者は、幸田露伴の都市論、東京論を高く評価していますが、それはなぜでしょうか。言い換えればどんな「成果となってあらわれている」のでしょうか。ここで、主な対比に立ち戻って考えてみましょう。従来、かつての故郷といえば、自然豊かな農村やムラなどであったのに対し、原点的な故郷は誰にでもあること、都会も故郷たりえることを筆者は力説しています。この筆者の考えに見事に応えてくれる「成果」を幸田露伴の東京論がもたらしてくれた。これをまとめているのが、最終段落、最終行です。「最も今日的な意味で都会の故郷性を論じているといえる」です。これを字数指定に合うように十字以内で書けば、「今日的な都会の故郷論」といった表現になるでしょう。得点になるポイント箇所を細かく言いますよ。第一ポイント「今日的」「現代的」「現代にも通じる」などの表現です。第二ポイントは「都会」「都市」にふれることです。「東京」だけだと都市の一例ですので、△です。第三ポイントは「故郷」「故郷性」にふれていることです。第四ポイント「論じている」「論」です。四つのポイントの内、二つ取れるとよいですね。

**模範解答**

問１＝①　問２　地縁、血縁のしがらみ　問３＝③

問４　東京は異郷であった　問５　今日的な都会の故郷論

# 復習問題　解答　第十九講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）①　（オ）⑤
（カ）③　（キ）①　（ク）④　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）封建　（イ）束縛　（ウ）遺骸　（エ）古典　（オ）雑踏
（カ）無償　（キ）洞察　（ク）迫力　（ケ）鋭敏　（コ）感傷